

命をみつめて

高橋 富士子

滋賀県立短期大学

法律事務所に勤務していた私が看護の道に進もうと決意したのは、徳永進先生の『死のなかの笑み』（ゆみる出版）を読んだのがきっかけである。そして、新しい命を手にすることができる仕事に魅力を感じ、助産婦の道を選んだ。臨床では、新しい命に出会うたびに、人間は誰でもこんなに無垢だったのだと、自分自身の生き方を改めて考えさせられていた。

一人の母親の死

出産直後の母と子は、互いに見つめ合い、そして母は子を抱きしめてやりたいと思い、子供の幸せな未来をひたむきに願う。私は2年前、臨床で勤務している時、そんな母と子の絆が生後1週間余りで断たれてしまった事例に出会った。クリスマスが近づくたびにその母親のことを思い出し、また助産婦として決して忘れてはいけない事例だと思い、ここに書き残しておきたい。

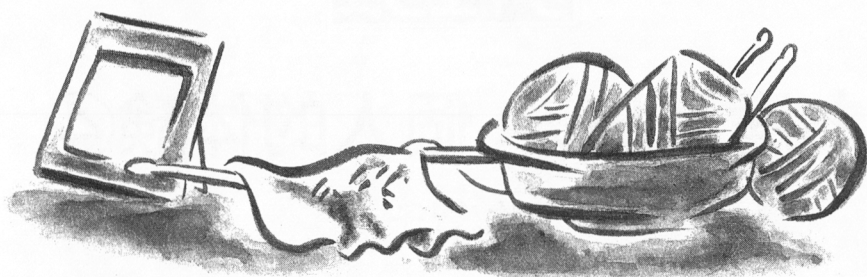
それは1991年12月24日、産褥8日目の母親Mさん、30歳が、原因不明の急性呼吸不全で亡くなったことである。Mさんに関わった助産婦の話やカルテから、死に至るまでの経過を振り返ると次のようである。

Mさんは女兒を無事出産し、産褥7日目に退院した。その時、感冒症状があったため、内服薬が処方された。そして次の日の朝から午後にかけて、3回産婦人科外来に電話をしてきた。1回目は「薬を飲んでからドキドキするんです」という内容であり、電話に対応した助産婦は何の薬を内服しているか確認せず、安静にして様子を見るように答

えた。2回目は「安静にしているんですが、ドキドキするし、息苦しいんです」とハーハーと呼吸をしながら電話をしてきた。その時に対応した助産婦は、内服している薬が風邪薬であることを確認し、内服をやめて様子を見るように答えた。3回目は午後4時30分頃にあり、その時の電話を主治医につなぎ、主治医はMさんに脈をはからせ、脈が1分間に150あることから、近くの内科の病院を受診するか、この病院に来るかしたほうがよいと答えた。

そして午後6時頃4回目の電話が産婦人科病棟にあり、「近くの病院を探したが、今の時間に診察してくれるところはなかった。やはりしんどいんです」と訴えた。電話に対応した準夜勤務の助産婦がすぐ来るように答え、しばらくしてMさんは家族に付き添われて来院した。病棟についた時には全身チアノーゼでハーハーと肩呼吸をしていた。すぐに医師を呼び救急処置が行なわれたが、徐々に血圧は低下し、尿は流出しなくなり、意識がなくなっていった。救急病院に依頼したが、どこも満床ということで、引き受けてくれなかった。最後にカウンターショックが行なわれたが、その甲斐もなく午後10時22分、Mさんは永眠された。私が深夜勤務のため病棟に着いた時は死後の処置が終わり、退院される時であったが、家族が「3回も電話をしたのに、看護婦さんは安静にしていなさいと言っただけだ……」と何度も繰り返していた言葉が印象に残っていた。

次の日、この事例について、婦長は電話に対応した助産婦に事情を聞き、スタッフに対しては、患者からの電話の対応に気をつけること、看護者



で判断せず、医師に報告することなどの忠告をするだけに終わり、何も話し合いが持たれなかった。Mさんは、受診したくても、子供たちが楽しいクリスマスの夜を過ごせるようにと思い、来院しなかったのかもしれない。しかし、早く受診し治療を受けていたら命を亡くすことはなかったかもしれないし、もし亡くなったとしても、それなりの対応・処置を行っていたら、家族からあのような言葉は聞かれなかったのではないかと思う。

私は、カンファレンスを持ち、この事例で何が問題なのか、看護者としてどう対応すべきであったのか、今後はどうすればよいのか、そして看護者の役割は何なのか、などについて話し合えなかったことを今でも残念に思う。助産婦は母と子の命、未来に関わる仕事である。看護を毎日続けていくだけではなく、看護を振り返り、これでいいのであろうかと考え、討論し合う機会をもっと持つことが必要ではないだろうか。毎年やってくるクリスマスはMさんの家族にとって悲しい思い出の日となるであろう。私にとってこの季節は、Mさんの死を無駄にしないために、自分自身の看護を振り返る時でもある。

ハーブ演奏者との出会い

私は今、臨床を離れ、教育に携わる仕事をしている。この仕事は看護婦を育てるだけでなく、今までの自分の看護を振り返り、また客観的に看護を見つめられる機会であると思っている。31歳から看護の世界に入り、少し遅い出発で、経験も浅いが、たくさんの方々との出会いによって、看護

についての考えが深まってきたような気がする。

1年前に出会った、ハーピストであり、ミュージック・セラピストである池田千鶴子さんもその1人である。池田さんは、フォトジャーナリスト岡村昭彦氏の遺志を生き継ぎ、ハーブをワゴン車に乗せ、全国、世界をかけめぐり、病院・施設・学校で個性のある演奏活動をしている。池田さんのハーブから奏でられる音楽と語らいは、不思議と一人一人の心をやすらかにし、生きる勇気を与えてくれるのである。池田さんの亡きお母さんが病に苦しんでいる時、少しでも楽にさせたい、助けたいという思いで、自分が演奏したピアノの録音テープを聞かせると、今まで入らなかった点滴がスーと入ったという話に私は感動し、心の中に刻みこまれている。そうなのは母と子の絆があったからなのか、それとも美しい音色のせいなのかわからないが、その話の中に看護にとって大切な原点があるように思える。私はハーブ演奏のかわりに、目と心と手で看護や助産を行なっていきたいと思う。

読者のみなさんにも、是非池田千鶴子さんの演奏から命のいとおしさを感じとってほしいと願う。

* * *

私のよき友人であり、なんでも語り合える同志である李さん、紹介ありがとうございます。次は、静岡で昭和27年から開業され、今でも入院・分娩をあつかっていらっしゃる70歳の助産婦さん、坂田良子先生にリレーをしたいと思います。